

竹河巻は紫式部原作であろう（下）

今井，源衛
九州大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/12133>

出版情報：語文研究. 39/40, pp.102-111, 1975-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

竹河卷は紫式部原作であろう（下）

今井源衛

本稿は、文学研究第三九・四〇合併号掲載「竹河卷は紫式部原作であろう」（上）の続稿である。

五

この問題は、以上のように、物語本文の内部徴証にのみ手がかりを求めるとかぎり、その矛盾の解決は不可能のように、私は思われる。むしろ外的要因によつて事は起つたのではないか。結論を先に云えば、「左大臣」の名を夕霧に冠すること、当時の宮廷に於いては「左大臣」は道長その人を指す語であつたこととの間にふかい関係があつた、と私は察するのである。以下それについて詳しく述べてみたい。

問題の夕霧任左大臣の記述というのは、前にも述べたように、本卷々末に近く、玉鬘の娘の大君が冷泉院に院参の後、第一皇子に続いて第二皇子を出産したあと、宮仕えが気まずくなつて里がちであることを述べたあとに

左大臣夫せたまひて、右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。つきつぎの人なりあがりて、

この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびしたまへる人々、この御族よりほかに人なき頃ほひになむありける。

とあるのを指すのである。この記述が有力諸伝本の本文に徴しても、またこの叙任の経緯に徴しても、誤写とか単なる作者のケアレミスなどではあり得ないことも前述の通りである。とすれば、問題は、この構想の性格自体と、また何故それが橋姫巻以降に於いて元通りの右大臣に逆戻りしなければならなかつたか、の二点にあると考えられるのである。

そのため、私はここでは、まず登場人物を「左大臣」に叙することの意味を考え、しかるのちにさらに、夕霧がそれに任ずることの意味について考えてみたい。

源氏物語の登場人物の中、大臣に任じた者について調べると、左の如くである。

- 1 右大臣。いわゆる中世に「あし大臣」と呼ばれた人。弘徽殿太后・朧月夜等の父として大いに活躍する。桐壺巻で右大臣として登場し、そのまま衰巻に至り太政大臣となり

明石巻で薨去。左大臣を経ない。

2 左大臣。源氏の舅。葵上・頭中将らの父として大いに活躍する。桐壺巻に左大臣として登場し、賢木巻に致仕の表を奉じて空居。滝標巻に冷泉帝即位と共に摂政太政大臣、薄雲巻に逝去。

3 光源氏。明石浦より帰京後、権大納言に任じ、摂政。翌年冷泉即位と共に、内大臣に昇り摂政を左大臣に譲る（滝標）。そのまま推移し、少女巻に至って、右左大臣を経ずして太政大臣となる。藤裏葉巻に今上即位と共に準太上天皇。頭中将。終始大いに活躍する。薄雲巻に大納言となる。

4 少女巻に内大臣となり、源氏の譲りを受けて政務を執る。藤裏葉巻に、源氏の後任として、右・左大臣を経ずして太政大臣に任ずる。若菜下巻、今上即位と共に致仕。

5 夕霧。源氏の長男。大いに活躍。若菜下に大納言となり、匂宮巻に右大臣。竹河巻に左大臣に任じるが、橋姫巻以降ふたたび右大臣。

6 紅梅。かなり活躍。頭中将の弟、匂宮巻で按察使大納言として見え、竹河巻に右大臣兼大将。橋姫巻以降は再び大納言。

7 髭黒大将。玉鬘の夫。承香殿女御の兄弟。後に記す9の子か。若菜下巻に、今上即位に当り左大将から右大臣に昇り、政務を執る（関白か）。某年太政大臣となり、やがて致仕、薨去（紅梅）。大いに活躍。

以上が登場人物としての具体的内容を持ち、多少とも活躍する「大臣」のすべてである。が、その外に、名のみひといしい人

物も数人がぞえることができる。一応列挙すれば、左の通り。

8 左大臣。冷泉帝の女御の父。真木柱巻に「左大殿の女御」と見え、行幸巻に「左右大臣」の名が行幸供奉者中に見えるのみで、他の詳しいことは一切不明。12参照。

9 左大臣。今上帝の麗景殿女御の父。梅枝巻に「左大殿の三の君参りたまひぬ」とある。この人は、宿木巻に「その頃藤壺と聞ゆるは故左大臣殿の女御になむおはしける。（中略）父大臣のいかめしかりし名残いたく衰へねば」とある人と同人かとの説もある。詳しくは不明。

10 右大臣。朱雀帝の承香殿女御の父。髭黒の父。今上帝の外祖父もこの人かとの説がある。明石巻には「当帝の御子は右大臣の娘承香殿の女御の御はらに男御子生れたまへる。」（四六八）とあり、藤袴巻には「この（髭黒）大将は春宮の女御の御はらからにぞおはしける」（九二八）とのみある。

11 右大臣。梅枝に「右大臣中務宮などのけしきばみい合せ給めるを」（九九〇）と、夕霧を婿取りしようとした人。河海抄は10かという。また次の12と同人とする説もあるが、記事は右だけで一切不詳。

12 右大臣。源氏の賀が嵯峨の御堂で催された折の出席者、「左右の大臣式部卿宮をはじめたてまつりてつきくは、まして参りたまはぬ人なし」（一一〇八一）とある。この記事だけで不明。

これ以外に「内大臣」はいない。

以上の中、8以下は当面、人物造型の内容を取り上げようとす

る本論としては、問題外とせざるを得ない。

残った117の七人についての、共通の問題点と思しきものを挙げれば、左の二点である。

一、光源氏・頭中将ともに、内大臣から一足とびに太政大臣に達して、左右大臣を経っていないこと。

二、右大臣は、桐壺巻から夢浮橋まで、葵上の父・髭黒・夕霧と、ほぼ全巻を覆って活躍するが、左大臣は、葵上の父が濔標で太政大臣となり、薄雲で退場したあとは、登場人物と称するに足る内容をもった者は、竹河巻の例の記事を除いては、他に全く現れない。この二条の意味について、以下逐次検討を加えることにしよう。

六

第一の、光源氏と頭中将が共に内大臣から左右大臣を経ずに太政大臣に至ることについては、すでに早くから花鳥余情が、少女巻において、

「内大臣転太政大臣例、忠義公兼通天延二年二月任太政大臣・元内大臣、但関白なり」

と注しており、さらに遡って河海抄は、「内大臣執政例」として、

堀河関白兼通忠義公、天祿三年十月廿一日内覧、十一月廿七日内大臣、中関白道隆公、永祚元年二月廿三日内大臣、二年五月関白、帥内大臣伊周公正曆五年八月廿四日内大臣、長徳元年三月八日内覧。

と注する。これを史書に徴してみても、ほぼ誤りが無い。

即ち藤原兼通は、天祿三年当時権中納言従三位であったが、父太政大臣伊尹の病革まって政を執ること叶わず、十月二十七日に内覧の宣旨を蒙り、翌十一月一日に伊尹薨ずるや、同月二十七日には内大臣に任じ、関白となった。公卿補任には、「自中納言任大臣例、執政人不經大将初例」と注し、また上首の源雅信、中納言朝成等を超え、大納言を歴ずして関白になった、などとも記している。兼通はさらに翌々天延二年二月二十八日に五十歳で正二位太政大臣に昇り、轡車を聴された。これまた「自内大臣任関白太政大臣初例」である。ついで三月二十六日には、万機を関白せよとの詔あり、内舍人二人、近衛四人を賜わって隨身とし、牛車を聴されたともある。ともかく、この兼通の昇進はまったく破天荒のものであったらしい。以後、内大臣から直ちに関白太政大臣に昇る例は再びは見えないのである。

しかし、この内大臣が内覧の宣旨を蒙り、または摂政関白となる道は、兼通によって開かれたといつてよい。中関白道隆は永祚元年、三十七歳で権大納言より内大臣となり、翌年五月父兼家が重病のため出家するに及んで、同月八日関白、二十六日摂政となった。以降かれは正曆二年七月内大臣を辞し、これを弟の道兼に譲り、以後は摂政として公卿を卒いた。道隆の息の伊周もまた正曆五年八月、二十一歳の若さで上位三人を超えて権大納言より一足とびに内大臣に任じ、翌年三月、父の病革るや、同二十九日内覧の宣旨を蒙った。これについて、当時右大臣であった道長が、史上有名な伊周との角逐に、姉詮子の後援によって内覧の宣旨を蒙ったのは、道隆の死後、同年六月十九日のことであった。時に道長三十歳である。

これら兼通―道隆―伊周らの例が、主としては父親の重態という特殊事情の下にはあつたが、比較的弱年で、内大臣のまま摂関の地位に就いた人として、天下の目をそば立たせたことは察するに余りがあり、その事実が光源氏や頭中将という、この物語中の二人の大立物の造型に適用されたことは十分に想像できる。その点で、この二人の出世コースには当時の史実がかなり色濃く反映していると見てよいのである。

第二の、右大臣はほぼ全巻に亘つて登場するが、左大臣は、濛標巻以降、これといった人物は現れないという事実はどうであらうか。まずその主因が、第一に光源氏・頭中将の二人が左大臣にも右大臣にもならなかつたことにあると想像することも出来よう。しかし、それだけでは、この左右大臣間の偏つたあり方の説明にはなるまい。

比較的早い時期の濛標以前までは、左右大臣が揃つていながら、それ以後全巻の四分の三の量に及んで、左大臣のみ実質的に姿を消す、というのは、第一印象からしても、均衡を失したものであるまいか。試みに史実に徴すれば、左右大臣のいづれか一方でも欠けた時代というのは、嘗てなかつた。太政大臣、あるいは内大臣の欠員は法規上いくらもあり得る事であり、事実その通りであるが、左右大臣は共に不可缺が鉄則である。源氏物語も前記のように、形式的には、全巻を通じて名だけは備つているといえようが、（それも確実ではない）、しかしその実質を尋ねてこうした偏りがある事自体、史実から受ける印象に喰違ふものがありそうである。

又、試みに、当時の他の物語に當つて、左右大臣をしらべてみよう。竹取物語には「左大臣阿部のみむらじ」があつて、に

せもの火鼠の皮衣を唐商人から買わされて、とんだ恥をかくのは周知の通りであるが、宇津保物語では、主人公仲忠の父の兼雅は国譲上巻で任右大臣。かなりの重要人物である。源季明は嵯峨院巻で左大臣、沖つ白波巻で太政大臣である。兼雅の兄の忠雅も嵯峨院巻で右大臣、内侍督巻で左大臣、国譲上では太政大臣と、弟よりも一足ずつ先の上つてゆく。まま子物語の父親役を勤める橘千蔭は俊陰巻以下に右大臣として登場し、貴宮の父源正頼は沖つ白波巻で任右大臣、国譲上巻で任左大臣。ここに内大臣が一人も見えないのは、やはり前記の兼通・道隆・伊周らの史実と同時か、それより以前にこの作品が成立したことを示している。またその昇進ぶりも、左↓太政、右↓左↓太政、右↓左などというふうで、三階級特進などの例はないし、左右大臣の造型や叙述の不均衡も感じられない。

落窪物語の場合には、主人公の道頼は、大納言―右大臣―太政大臣―太政大臣と昇り、その父左大将は、大納言―右大臣―太政大臣と進む。人物が少く資料にとぼしいうらみはあるが、内大臣はまだ現われなし、左右大臣間の不均衡はなさそうである。少くとも現存物語でみるかぎり、源氏物語にみられるように、とくに左大臣の造型が右大臣のそれに比べて見劣りがするといふことはないようであり、則闕の官といわれる太政大臣を別とすれば、左大臣が位人臣を極める職である限り、右大臣よりもむしろ左大臣の造型に力を注ぐのが当然と思われるのであり、源氏以外のこれらの物語の叙述は、その事を裏付けているといつてよいだろう。源氏物語の濛標巻以降の叙述は、先行する他の物語と比較してもやや特異な感を抱かせるのである。内大臣が摂関に就く記述に於いては、かなり史実に忠実に随いながら、

左大臣の造型に關しても、むしろ史実にそぐわず、物語の常型にも随わないというのは、どういふことなのであろうか。それについては以下あらためて別の角度から考えることにしたい。

七

事は、おそらくは「左大臣」の呼称と、物語中におけるその職にある人物の役割に關わる問題ではあるまいか。

「左大臣」の呼称というのは、紫式部の物語執筆當時に即して考えた場合、それは藤原道長その人を指す言葉であつたといふことだ。

紫式部が源氏物語を書きはじめた長保二年には、道長はずでに政權を掌握して数年を経た。かれは前述の如く、長徳元年五月に内覧の宣旨を蒙つて、堂上の覇者となるや、翌二年六月二十五日右大臣、さらに七月二十日左大臣と昇進を重ね、以來位も正二位に達していた。時の右大臣は凡庸な顯光であり、かれは、長徳二年道長が左大臣に上つたあとを受けて右大臣に任ぜられていたのである。周囲にもはや誰一人として怖るべき者はなく、道長はまさに旭日昇天の勢いであつた。

紫式部は、その頃、未亡人として実家に淋しく暮っていた。彼女の耳にも道長の威勢やそのスケールの大きな人柄のことなども噂としては入ってきたであらう。しかし、それは直接見聞するものでないかぎり、彼女の物語にそのまま素材として取入れられる事はなかつたであらう。彼女は、よくいわれるようにそれまでの他の物語の方法に従つて、筋を立て、人物を構え、それに新しい肉付けを与えていった。物語の当初に當つて、帝

をはじめ左右大臣が出揃うのは当然にすぎない。それは政界の常識であり、また世間一般の物語の常套の構想でもあつた。式の物語はこうして、おそらくは、寛弘二年末の出仕の頃まで書き継がれていったであらう。その頃、物語の中では、葵上の父左大臣は至つて健在であつた。

紫式部が出仕したとき、物語がどこまで進んでいたか、それは難しい問題だが、私はかつて、その範圍を一応桐壺から明石巻あたりまでと推定して^半おいたが、現在でも、当らずといへども遠からずと考えている。

濔標卷あたりを境として、以後にわかには源氏と頭中将との対立が目立つてくるが、それは作者が當時の藤原摂関家間の角逐暗闘に想を得たものらしいこと、また、そこに紫式部の宮廷生活の体験を介在させて考へることは、ほぼ学界の通説に化しつゝあるといつてよいであらう。

こうして出仕して間もなく濔標が書かれ、左大臣は摂政太政大臣となり、さらに薄雲卷で死去する。そして、以後夢浮橋卷末まで、竹河卷の一条を除けば以後左大臣として、實質的に活躍する人物は皆無なのである。それは、出仕後の紫式部にとつて、「左大臣」の實質的造型を憚らせる何らかの強い理由があつたためだ、と私は考へたいのであり、それは、當時の左大臣であつた道長の存在そのものであろうと思ふのである。

当時、道長が人々から「左大臣」を以て呼ばれた事はいままさらしいまでもない。権記や小右記では「左大臣」のほか「左府」「相府」などの語を用いて道長を指し、紫式部日記では、「殿」と呼んでいる。しかし、これは紫式部にとつて、道長は主人で

あるから、そうしたやや内輪の呼び方をするのである。当時の宮廷人にとつても紫式部にとつても、少くとも「左大臣」なる語が、当時にあつては、道長その人と切り離せない固有名詞的なイメージを帯びた語と化していたことは疑えないであらう。

人々は物語中の「左大臣」にも、しばしば道長を思い浮べたであらうし、少くともその危険は十分にあつた。日記の中にあれほど道長のことを気にしている紫式部であれば、その事に平気であつたとも考えられないのであり、そのような危険を敢て冒してまでも、「左大臣」を造型する気はしなかつたであらう。

「左大臣」の造型は、道長の存在のために、はなはだしく拘束されていた。事実上自由な造型は不可能であつたとさえ思われるのである。藩標巻からあと、「左大臣」が実質的に姿を消すのは先の光源氏・頭中将の二段階昇進のことと相俟つて、ここにその大きな理由があつたと思われる。

八

それでは、問題の竹河巻の夕霧任左大臣の記事はどう解すべきか。前掲の「左大臣失せたまひて、右は左に……」の文は、実は夕霧の任左大臣を書くことに趣旨があるのではない。すでに物語中、第一の大立物となつてゐる夕霧の昇進自身に叙述の眼目があるのならば、それをただ単に、そつげなく「右は左に」とのみ記して済ませるはずがなからう。はたして、この時作者は「右」が夕霧であつたかどうか也十分には自覚してはいなかつたのではないだろうか。

というのは、この人々昇進の記事の趣旨は、むしろ、巻末の

玉鬘の我が家の不如意を嘆く場面を描くことにあつたと思われるのだ。左大臣逝去に伴う臨事の昇任人事によつて、薫も、藏人少将も紅梅もみな一級ずつ上り、そのお礼回りに晴れ姿で玉鬘を訪れる、あるいは紅梅の右大臣新任祝賀の宴会の騒ぎが、隣家から聞えてきて、玉鬘はひとしお夫亡きあとの一家の淋しさが身にしみ、さては息子たちばかりが不遇なのではないかと嘆いている、というのである。この巻末の収めかたは、「わる御たちの間はす語り」だといふこの一巻の内容にいかにもふさわしくすぐれているが、それを有効にするために、この昇任人事が行われるのである。その為には薫も藏人少将も紅梅も同時に昇進する事が必要であり、また、紅梅大納言が右大臣に上るためには、その上の誰か、右大臣か左大臣かが死ぬ必要がある。物語の主要人物である右大臣夕霧をそうやすやすと死なせるわけにはいかなないから、身許も不明な「左大臣」を急に死なせるほかになく、そのあとは「右は左に、藤大納言（中略）右大臣になりたまふ。次々の人……」という形ですべて処理できる。主眼は、紅梅や夕霧の右大臣・左大臣への昇進にあるのではないのであり、それは、この巻独自の、またこの場面やら結末やらの為の便宜的手段にすぎないのである。夕霧が左大臣に上るといふ重要事を「右は左に」と一語で片づけるところ、私は作者が、それをはたして夕霧の事として十分に意識していたかあやしいと思ふし、また気がついていたらとしても、その事を読者に勘づかせたくないような気持になつていたのでないかと思ふ。紅梅が大納言から右大臣になる必要があり、したがつて、夕霧右大臣は下から押し上げられて左大臣になるほかなかつたのだ

ろう。またその間には、前に「侍従」の設定の条で触れたような、作者の安易な、気を抜いた執筆態度も手伝っていたと想像することも出来るよう。

私は前に、作者は幻巻までを寛弘五年十一月十七日まで、以下宇治十帖は寛弘七年二月より同年六月頃までに各執筆したと考^考えた。また匂宮・紅梅・竹河の三巻の完成については、宇治十帖執筆進行中か、もしくはその直後二三年以内か、としたのであった。私はその前半については、今も考えは変わっていないが、匂・紅・竹三帖の執筆時期については、修正の必要を感じている。が、今この三帖全体について扱^扱う余裕はないので、ここでは竹河一巻にのみ限って考えてみたい。

右の私の考えによると、幻巻まで書き終えたあと、橘姫を書きはじめるまで、約一年二ヶ月の空白期があるわけだが、私は今前説を修正して、この間に匂紅竹の三帖が書かれたと考^考えている。

第一・二部を通じて、ようやく光源氏の生涯を書き終えようとしていた作者にとつて、おそらく第二部の完稿以前から高かったであろう読者の続稿を望む声は、幻巻擱筆と共にいよいよ高まって、ほとんど拒否し難いものとなったであろう。それに押されて、構想も十分には熟さないままに、式部は再び筆を執りはじめた。「光隠れたまひにし後、かの御影に立ちつぎたまふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」という匂宮巻の語り出しは、そうした作者の苦渋を含んだ重い気持を物語るかのようである。

物語は、亡き光源氏の物語の続きである以上は、その子孫が

主人公でなければならぬ。匂宮巻では、こうして薫と匂宮との二人の生い立ちが紹介され、配する女性として女一宮・夕霧の六君、さらに冷泉院の女一宮が登場するけれど、ほとんど恋物語らしい発展を示さずに終る。紅梅巻では、やや唐突に紅梅大納言の家庭が材料となる。しばらくぶりに顔を出した大納言の後妻眞木柱の三人の娘が話の中心で、大君は東宮に参り、中の君は匂宮にと父大納言は望んでいる。眞木柱の連れ子の宮の君に、ままた父の大納言は好色心を抱いているが、匂宮も宮の君に思いを寄せている。眞木柱は匂宮の好色の噂を聞いてためらっている。——紅梅巻もまた物語としての発展はほとんど認められず、共に匂宮・薫の将来についての種々の可能性を思わせるだけで終っている。竹河巻は、それらに続いて、前述のような内容であり、三帖の中ではもっとも物語らしい展開を示しているといつてよい。

しかし、総じていえば、すでに定評となっているように、この三帖には他の巻に見られるような、明白な主題性や、主人公の活躍がなく、活躍するのは、竹河巻でいえば、薫や匂宮というよりは、むしろ玉鬘や蔵人少将というような脇役なのである。ということ、匂宮巻頭にはかすも漏らされたように、作者の情熱や愛情を傾倒するに値いするだけの主人公がもはやなくなっており、書くべき目標が必ずしも明らかでなかったという事かもしれないし、あるいは、作者の書きたいことは、竹河巻に見られるように、薫や匂宮という年若い青年には荷わせることの出来ない、中年男女の苦勞であったからか。しかし、それは当時の物語としては、かなり危険で、形式と内容に分裂を来

たす惧れのあるものだった。この心理的停滞あるいは摸索の段階にあって、この三帖は物語らしい発展も見せず、文章にもこのびした所を失って説明に陥り易く、また悪文とも云われるほどの重複や無駄な用語・表現が目立ち、あるいは気の抜けたところも生れたのであろう。そうした中で、竹河巻末の例の昇進の記事は書かれたが、それは以上にのべたような幾つかの悪条件の重なった上のことであることを察する必要がある。

九

ところで、竹河を書き終って一年余、つぎの宇治十帖を書き始めるまでの間に、作者の仕える官廷には大きな事件が起つていた。私が、『紫式部』に於いて、橋姫の執筆が寛弘七年二月以降と推定したのは、寛弘六年の道長呪咀事件と、翌七年正月末の藤原伊周の死去を考慮した結果であり、その詳しい事情については、今ここにあらためてくりかえすことはしない。この事件が敗残の中閔白遺族に止めの一撃を加えるものであつたことや、自ら仕える官廷の只中で起つた事件だけに、紫式部がそれによって大きな衝撃を受けたであろうことも十分に想像できるのである。伊周はその死の床にあって、愛娘たちに、こう遺言したという。

をのれ亡くなりなば、いかなるふるまひどもをかし給はん
ずらん。(中略) などで世にありつる折、神仏にも「をの
がある折、先にたてたまへ」と祈り請はざりつらんと思ふ
が悔しき事。さりとて尼になし奉らんとすれば、人聞きも
の狂ほしきものから、あやしの法師の具どもになり給はん

ずかし。あはれに悲しきわざかな。まろが死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様おきて給はば、必ず恨みきこえんとす。ゆめゆめまろが亡からん世の面伏せ、まろを人にいひ笑はせ給ふなよ。(栄花物語初花)

この言葉が、橋姫巻の八宮の遺言に酷似していることも、先人のすでに指摘するところである。私はそこに宇治十帖の執筆時を解く鍵を見たのである。この遺言の内容が噂となつて紫式部の耳に入つてきた時、一年余の間停迷摸索していた新しい物語の主題と構想とは、式部の脳裏に一条の光を得て、にわかにはつきりとその形を成したのではなからうか。橋姫から総角・宿木あたりまで構想・表現ともに淀みがなく、定まったコースを一直線に進む趣きがあるのも、そのためであらう。

しかし、実は、其処に一つの困つた問題が起つた。例の夕霧左大臣の件である。夕霧の性格はすでに竹河巻に於いても、多少は敵役的なところがあるが、しかし人物としてはさほど難点はないといえる。しかし、橋姫以降では、その役柄はさらに変貌する。彼は官廷貴族中の第一人者であり、特に匂宮の伯父として、その監督者を以て自任しているらしい。夕霧の存在は、絶えず、直接間接に宇治の姫君たちに脅威を与え、その影は彼女等の不幸を増幅する。責祿は十分ながら、その固苦しさや律義さに、薫も匂宮も辟易する。彼は又、威儀正しいが、思いやりには欠け、娘の六君を匂宮にもらつてほしいと思つているが、匂宮が一向その気にならぬのに焦つてみたり、一度は婿にと思つた薫を、帝がうまく婿取りするのを見て、負け惜しみにいや味な陰口を利いたりするのである。彼は今や、完全に品のいい

敵役になりきっている。

こうした夕霧の性格・役割は、橘姫執筆開始当初からすでに作者の脳中に明確に出来上っていたにちがいない。とすれば、その時、このような人物に道長のことと誤解されかねない「左大臣」の称を竹河卷末に引つづいて与えることが、はたして作者になし得たであろうか。濛標巻以来、「左大臣」に実質を与えることを細心に避け通してきたことも、それでは無に帰してしまふであろう。もしどうしても「左大臣」に再び実質を賦与しなければならぬのなら、それは頭中将の父左大臣の如き好人物である必要がある。脳裏にある夕霧では無理なのだ。

また二つには、時期も時期であった。彰子の高級女官であった紫式部にも、前年からの伊周一族の悲運も、その裏に道長の手が動いたであろうことは、おそらく察せられたことであろうし、そうした政治的人物としての道長の暗い側面にも、彼女は勘付いていたに違いない。帝の蔭口を利いたり、若者に向つて押し付けがましい態度に出る人物を「左大臣」と呼ぶことは、この際特に気がねであつただろう。その点「右大臣」ならば問題は無い。当時の右大臣顕光は、紫式部も時に軽蔑する外ない人物だったのであり、世人の評価も低かつたのだ。よしんば顕光がどう思おうと、道長邸の女房である紫式部について、直接どのような文句のつけようもなかつただろう。また第一、夕霧右大臣は、物語で十年來その任にあつて、今に始まつたことではないのである。

要するに紫式部にとつて、夕霧左大臣の形で物語を書き進めることは、もはや不可能であつた。とすれば、竹河卷末の叙任

を撤回するか、あるいはそれを無視することしか道は残されていないのである。竹河卷はおそらく、前年の擱筆後早々に巷間に出て、人々の手から手へと写されていたであろう。もはや撤回は不可能である。また、あのような事情によつて構想された夕霧・紅梅・薫等の昇進を撤回すれば、竹河卷としては作品として成り立たなくなつてしまふ。いづれにしても、道は一つ、夕霧任左大臣を無視することしかないし、またその事はやや体裁が悪いとはいふものの、記述自体はまことに容易であつた。

叙任の無視とは、具体的には、橘姫に於いて、夕霧を右大臣、紅梅を大納言、薫を中将に、藏人少将を三位中将として出発させるということである。このうち、夕霧と紅梅がこの方針通りに宇治十帖を一貫していることは前述の通りである。薫は橘姫では宰相中将であるが椎本巻（七〇年秋）に中納言、宿木巻に権大納言兼右大将と昇進する。藏人少将は、総角にはじめて登場し、この時宰相中将である。薫と藏人少将の昇進は、右のような「左大臣」に推し及ぶ性格のものではないから、これらはいずれもあまり問題にならないのである。諸注、薫の中納言昇進の記述の一致することから、椎本巻第七〇年秋の時点が竹河卷末に、重ねて年立を制作するのであるが、それは、右のような執筆事情を推察すれば、むしろ、第二義的な意味しか持ち合わせまい。要するに、竹河卷末の夕霧以下の昇任の記述が、もし結果論的にのみいえば軽卒だつたということにならうし、創作過程に即して云えば、止むを得なかつた、ということにもならう。大長篇の中にしばしば見出される大きな屈折点を境にして、前後に構想の変化が起ることはありがちな事であるが、この場合の

ように、内的要因としての軽卒の上に、不可測の外的要因の加重があつて、前後に露骨な不合理を生ずる場合もありそうに考えられる。本論は、そうした事例の一つであらうかと推測するのである。

注

- (1) 拙著『紫式部』一九五ページ
- (2) 同右書一九六ページ
- (3) 手塚昇氏『源氏物語の新研究』一六九ページ
- (4) 紫式部日記寛弘五年十一月一日条に「右の大臣より御凡帳のほころびより引きたちみだれたまふ。さだすぎたりとつきしろふもしらず、屬をとり、たはぶれごとはしたなきも多かり。」顯光時に六十五歳である。

(附記) 本研究は昭和四十九年度文部省科学研究助成金(総合)の下附を得たもの一部である。